

あとがき

このたび、編集委員に加えていただきました。松谷章司先生の後任として主に病理関係の編集を担当いたします。430床の民間病院(社会福祉法人)の検査科に所属して18年目を迎えています(専門は病理、細胞診)。

昨年の今時分、仕事の手を休めて届いたばかりの本誌(2006年 Vol. 34 No. 1)を繰りつつ、コーヒーブレイク「煙を恋いうる詩」(四百数十床の公立病院に働く検査の士殿の全館禁煙に対する憂いの声)にいたく共感し、いったいこの興味深い欄は編集室のゴーストライター殿の著なのだろうかとお勤ぐっておりました。おりしも当編集委員への参加依頼の電話をいただき、とても驚き、すぐさまそのことをお尋ねしてしまいました。さて実際に編集を担当してみますと、コーヒーブレイクのみならずオピニオン、検査質問箱などはすべて読者諸氏の投稿に支えられているものであることがわかりました。今後とも暖かなご支援をお願いいたします。

われわれを取り巻く医療情勢の変化が著しく、一医療人の努力ではいかんとも抗しがたい面がありますが、検査科が合理化を求められるなかで、high quality と speed を追求し、さらにはチーム医療の一員として臨床サイドに出向く、そのような新しい環境に適応しつつ個々人の医療技術の向上をはかる、それに役立つような編集を目指したいと思います。私も編集に関与したものが紙面に載るようになり緊張しますが、今月号では個人的にはオピニオン“ISO15189は検査室の救世主となるか?”に最も興味を惹かれました。わが母校の検査室が大きく変貌し発展したであろうことを喜びはするものの、自分の働く民間病院を頼りとする患者にとって、米国の病院に所属する Hospital Based Labo と同様の「独立した組織であるかのごとき」検査科をめざすことが真に有意義であるかしばらく勉強したく思います。

新編集子であり、新年号であることから、多少の自己紹介と決意も含めたあとがきとさせていただきます。今後も本誌に対する読者諸氏のなおいっそうのご批判を賜りたくお願い申し上げます。

(手島伸一)